

東方問題をめぐる一考察 (1)

—— 1875 - 1878 年のバルカンの危機と列強外交 ——

A Study on the Eastern Question (1)

— The Balkan crisis of 1875–1878 and the Great Powers —

今井 (菅原) 淳子

Junko Imai (Sugahara)

1. はじめに

筆者は、19世紀半ば以降活発に展開してくるブルガリアの民族解放運動を研究課題とし、近隣のバルカン諸民族の運動との関連を把握しつつ、当時のヨーロッパ国際関係の中で位置付けることを作業としてきた¹⁾。バルカン半島をめぐる19世紀の国際関係は東方問題として認識され、バルカンは国際問題の焦点であった。

東方問題とはヨーロッパ側からの呼称であり、この問題に関する研究の先駆者であるマリOTT (J.A.R. Marriott) の言葉によると、「広義にははるかな昔からヨーロッパがヨーロッパ大陸南東部を舞台に東方の諸勢力と接触することで生じてきた問題」²⁾ ということになる。しかしイギリスの外交用語として初めて用いられたのはギリシア独立戦争 (1821-1829) の時である。それ以後、オスマン帝国の衰退に伴う同帝国のヨーロッパからの後退、それに相関するバルカンの被支配諸民族の独立運動、及びそれらをめぐる列強の利害関係という三つの要因の錯綜をその内容とすることになった。

東方問題は、バルカン半島において権力外交を展開してきた欧米において、主として外交史の立場から研究されてきた。1918年に出版されたマリOTTの著作は、勢力均衡論の視点から同時代的な感覚で書かれており、東方問題を列強間の外交史として扱った古典的な研究である。彼の研究を踏襲し、その後公開された資料を駆使して第二次世界大戦後に書かれたアンダーソン (M.S. Anderson)³⁾ の著作は、東方問題研究の総括ともいえよう。両者に代表される欧米の研究の共通点は、バルカン半島の問題を扱いながら、バルカン諸民族の動きという視点を全く欠落させていることにある⁴⁾。

一方、欧米の研究において列強外交の客体としてのみ扱われてきたブルガリアにおいては、東方問題そのものをテーマにした研究はまだ見られない。戦後のブルガリア史学では、おしなべてブルガリアの解放運動と一列強あるいは、バルカンの他の一国との関係を論じた研究が多い⁵⁾。とりわけ1990年の体制転換まではソ連との政治的関係に拘束され、ブルガリアの解放におけるロシアの援助や貢献に関する研究が数多くなされてきた。こうした視点はソ連のバルカン研究にも共通している⁶⁾。しかしその中でフリストフ (Хр. Христов) の研究は、ブルガリアにおける解放運動を論じつつ、欧米の文献にも目を通し、バルカンをめぐる列強外交の展開を考察している点で

重要である。しかし彼を含めブルガリアにおける研究は概して、バルカンの危機全体ひいては東方問題全体を見渡す視点に欠け、バルカン諸民族間の関係について言及することも少ない。

これらの諸研究を踏まえ、筆者はバルカン諸民族の立場に立ち次の二点から東方問題を考察している。第一点として、東方問題の展開の中でバルカン諸民族の解放運動と列強の動向がどのようにに関連したのか。具体的には列強が諸民族の解放、独立にどのようにに関わり、また一方で諸民族の側が列強や列強間対立をいかに利用したのか。第二点としては、利害対立のみ強調されてきたバルカン諸民族のあいだで、それぞれの解放運動の過程で協調の動きがどのようにみられたのかである。

さてこうした研究状況の中で、1983年にはブルガリアで『1875-1878のバルカンの危機』をテーマに初めて国際的なシンポジウムが開催され、バルカン各国や欧米の研究者が参加した。その報告集が *Insurrections, Wars, and the Eastern Crisis in 1870s.*⁷⁾ として1985年に出版されたが、その序文から明らかなように、東方問題研究の動向は基本的には変わってはいない。すなわちこのシンポジウムでは、東方問題における最も緊迫した局面である1875-1878年の危機に関して、以下のように二つの根本的な視点が確認された。バルカン以外の諸国の問題関心は、危機への国際的な関与や列強の役割を明らかにすることにあり、一方バルカン諸国の主たる関心は、危機の中で民族の独立を獲得したことにあるという二点である。

しかしこのシンポジウムでは、バルカンの危機における列強外交に関して、従来の研究から一歩踏み込んだ報告が行われている。一例としてダミヤノフ (S. Damianov)、イスラモフ (T. Islamov) が挙げられる。両者は、ロシアとオーストリア・ハンガリーの対外政策が、ともに国内的要



図2 The Balkan peninsula, 1817-1877

因に大きく影響を受けていたと考察している。

そこで本稿では、従来の研究に加え、上記報告集を紹介しながら、1875-1878年のバルカンの危機における列強外交を再検討したい。

1. バルカンの危機

14世紀末以来オスマン帝国の支配下に置かれたバルカン諸民族のあいだでは、18世紀末になると西欧の啓蒙思想などの影響を受けて知識人を中心に民族としての自覚が高まり、文化的な発展が見られた。民族的自覚を背景に19世紀初頭にはセルビア人、ギリシア人がオスマン支配に抵抗し蜂起した⁸⁾。いずれも長期にわたる独立戦争へと発展し、列強の介入の結果、最終的には1830年にセルビアは自治、ギリシアは独立を獲得した。この二つの戦争を契機にバルカンはヨーロッパ国際政治と密接に結びつくことになったのである。以後列強は、諸民族の独立運動の高まりの中で弱体化するオスマン帝国の問題に積極的に干渉することになった。とりわけ伝統的にバルカン半島に利害を有していたのがロシア、オーストリア、イギリスの三国であった。

18世紀半ば以来ロシアは、黒海とダーダネルス、ボスフォラス両海峡（以下、両海峡）の制海権を求めて南下政策を推し進め、オーストリアとともにオスマン帝国を弱体化させる勢力として登場してきていた。加えてロシアは、ロシア人と同様に東方正教を信仰し、スラヴ人の多いバルカン諸民族への影響力の浸透を目論んでいた。1768年の露土戦争での勝利により、オスマン帝国内のキリスト教徒の保護権を獲得していたが、最終目標はオスマン帝国の解体であった。このことはまた、バルカン諸民族の側にあつては解放者としてのロシアに期待を寄せていくことにつながった。

こうしたロシアの動向は、他の列強の警戒するところであった。なかでもイギリスは、オスマン帝国の領土保全を外交の眼目としており、19世紀を通じてロシアと鋭く対立することになった。オスマン帝国との貿易で多大の利益を上げ、さらにスエズ運河開通後はインドへの通商路の保障のためにも、オスマン帝国の現状維持はイギリスにとり最重要課題であった。このため、高揚しつつあるバルカン諸民族の解放運動に対しては、帝国内の行政改革をもって臨もうとしていた。

オーストリアはその地理的位置故に、16世紀以来数度にわたってオスマン帝国との戦争を繰り返してきた。オスマン帝国内のセルビア人などキリスト教徒は、その度ごと義勇兵としてオーストリア側に立って戦っている。こうした歴史的背景から、セルビア及びワラキア、モルドヴァ両公国（1861年に統一してルーマニア公国となる）への影響力の浸透をバルカン政策としていたオーストリアにとっても、対抗勢力ロシアの出現は無視できないものであった。その一方で多数のスラヴ人を国内に抱えるオーストリアは、バルカンの民族運動が自国へ波及することを危惧し、オスマン帝国の近い将来の崩壊は望まず、可能な限りにおいて現状維持を支持していた。

ヨーロッパにおける1848年の諸革命や、クリミア戦争（1853-1856）を経て、1870年代になるとバルカン諸民族のあいだで再び独立を求める運動が高揚した。1875年7月に始まったボスニア・ヘルツェゴヴィナでの農民蜂起は、1876年5月のブルガリアの蜂起、さらに同年6月セルビア、モンテネグロのオスマン帝国に対する宣戦へと展開し、バルカン情勢はかつてなく緊迫した。三帝同盟諸国を中心に列強はさまざまな形で事態の収拾を図るが失敗し、バルカンのキリスト教徒の保護者を標榜するロシアが1877年4月、単独でオスマン帝国との開戦に至ったのである。露土戦争後の1878年のベルリン会議において、バルカン諸民族の多くが独立を承認された。この時期を1875-1878年のバルカンの危機と呼ぶ。

バルカンの危機に関しては、両大戦間期にシートン・ワトソン (R.W. Seton-Watson)⁹⁾、ストヤノヴィッチ (M.D. Stojanovic)¹⁰⁾、サムナー (B.H. Sumner)¹¹⁾などのすぐれた研究が出されている。とりわけストヤノヴィッチの研究は、列国の外交文書を駆使した実証研究である。彼は外交史の立場から、バルカンの危機を第一次世界大戦の序曲と見なしている。彼の問題意識は、第一次世界大戦時の協商国と同盟国の対立の原点を1875-1878年に探ることに置かれている。すなわちロシアとオーストリアは、バルカンをめぐる利害対立を有しながら、1860年代末から70年代初めの国際関係の変化を背景に、ドイツ宰相ビスマルク (O.E.L. von Bismarck) の要請を受けて三帝同盟を成立させる。その結果、バルカンの危機に際して、両国は牽制しつつも協調の道を探ることになる。そこでは、状況によっては自国のバルカンにおける目標の達成を図ろうとする意図を読みとることができる。しかし露土戦争 (1877-1878) 後のベルリン会議において、戦勝国ながらバルカンにおける利益を著しく奪われたロシアと、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの占領権を得て南進の道を確保したオーストリアの対立は決定的になるのであった。

2. 三帝同盟の成立

ヨーロッパ国際関係は、1871年の普仏戦争におけるプロイセンの勝利とそれに伴うドイツ帝国の成立によって、大きな転換点を迎えることになった。ここで三帝同盟成立の過程について触れておきたい。

クリミア戦争に敗北したロシアは、その後約20年間、積極的な外交政策の遂行には慎重であった。外相ゴルチャコフ (А.М.Горчаков) を中心とする穏健で自由主義的な政治家たちは、国内の経済的な立ち遅れを克服することがひいては軍事力の増強につながると考えており、大規模な国内改革に取り組んでいた。

ロシアのこうした姿勢は、東方問題への対応にも影響を与えることになった。オスマン帝国の解体とバルカン諸民族の解放運動への支援という伝統的な政策を放棄するのではなく、外交の枠内で平和的手段で遂行しようとするに至ったのである。その一方でバルカン諸民族への影響力を失わないためにも、かれらの立場の改善や自治の強化などを、オスマン政府に積極的に働きかけていた。ゴルチャコフは、ヨーロッパ列強を敵にまわしたクリミア戦争の教訓から、早急で危険な軍事行動よりも、オスマン帝国の自然な解体を待つことに利があると考えていた。しかしロシア国内の汎スラヴ主義的な動きを鑑み、その実行の難しさも理解していた。

クリミア戦争後の国際政治における孤立を克服し、政治的威信の回復を主たる外交目標としてきたロシアは、オスマン帝国の現状維持の熱心な支持者であるイギリスに対抗する目的もあり、巧妙にドイツ、オーストリアへの接近を試みたのであった。

1871年、普仏戦争におけるフランスの敗北を受けてロシアは、黒海における行動の自由を制限していた1856年パリ講和の条項を破棄し、他の列強の承認を得ることに成功した。この後ロシアはそれまでの慎重なバルカン政策を放棄することになる。ダミヤノフは条項破棄の要因として、クリミア戦争後の諸改革により経済力を高めてきた商人、資本家の要求に応えるためでもあったとしている¹²⁾。この時期、黒海、両海峡問題は戦略上のみならず、穀物輸出の航路の確保という点から南ロシアの経済全体にとり重要になっていた。

オーストリアにとって1859-1866年の諸戦争の結果は、自らの運命を決定的にするものであった。1866年の普墺戦争に敗北した結果、ドイツ統一の覇権をプロイセンに譲り、帝国の再編に着手した。1867年に成立したアウスグライヒ (和協) により、多民族国家オーストリアは帝国内のハ

	二重帝国 (全体)	オーストリア帝国	ハンガリー王国
ドイツ人	23.9	35.6	9.8
チェコ人	12.6	23.0	
ポーランド人	10.0	17.8	
ウクライナ人	7.9	12.6	2.3
スロヴェニア人	2.6	4.5	
セルビア・クロアチア人	9.1	2.8	14.1
イタリア人	2.0	2.7	
ルーマニア人	6.4	1.0	14.1
マジャール人	20.2		48.1
スロヴァキア人	3.8		9.4
イスラム教徒	1.2		

図1 民族別人口構成 (%)

(1918年)

ンガリー人 (マジャール人) に王国として内的独立を与え、ドイツ人とハンガリー人が他の諸民族を支配するオーストリア・ハンガリー二重帝国となった。オーストリア皇帝がハンガリー国王を兼ね、外交、軍事、大蔵は共通大臣が任命された。このことはその後の二重帝国の外交政策が、国内的にはハンガリーとの調整を必要とすることを示していた。1849年以来ハンガリーにおいて反ロシア感情が強かったことは、二重帝国の外交政策に大きく影響することになった。

さらにドイツ帝国の成立も、二重帝国の外交政策に影響を与えることになった。ドイツ統一をめぐる戦いの中ではビスマルクと敵対し、むしろフランスとの協商に好意的であったオーストリア・ハンガリー首相ボイスト (F.F. Beust) は、1871年5月、皇帝フランツ・ヨーゼフ (Fransis Joseph) への書簡で、対外政策の変更を提案した。その中で彼は、二重帝国はドイツの存在を考慮し、ドイツと結び、ドイツの仲介でロシアと和解すべきであると説いた。さらに普仏戦争後の国際状況の中で、帝国の拡大は東方においてのみ可能とし、優先的な目標としてボスニア・ヘルツェゴヴィナの獲得を強調している¹³⁾。皇帝の承認を得たボイストは、早速ビスマルクと会談し、オーストリアの関心を西から東に向けようとしていたドイツ宰相もこの政策を承知したのであった。

オーストリアはクリミア戦争後、領土拡大の目標としてボスニア・ヘルツェゴヴィナ、さらにアルバニア、セルビア、西マケドニアを考えるようになっていた。しかし普墺戦争後は、バルカンにおける大規模な領土獲得をあきらめ、目標をボスニア・ヘルツェゴヴィナに集約させた。同地方の戦略的重要性が極めて高いことがその理由である。すなわち19世紀初めにヴェネツィアから獲得したダルマチアを守るという防衛的重要性と、将来的な目標であるエーゲ海の港テッサロニキへの進出への拠点としてであった。さらにイスラモフは、政治的発言権を強めつつあった産業ブルジョアジーの視点からは、同地方の豊かな森と鉱物資源は魅力であったという経済的理由を挙げている¹⁴⁾。

帝国成立後のドイツは、対独復讐を目論むフランスをヨーロッパの中で孤立させることを対外政策の眼目としていた。ビスマルクにとっての難問はロシアであり、クリミア戦争以来のオーストリアに対するロシアの反感を取り除くことができるかが問題であった。こうした状況の中で1872年9月、ベルリンでドイツ皇帝ウィルヘルム1世 (Wilhelm I)、ロシア皇帝アレクサンドル2世 (Александр II)、オーストリア・ハンガリー皇帝フランツ・ヨーゼフの三帝は会談を持った。時を同じくして行なわれたロシア外相ゴルチャコフとオーストリア・ハンガリー外相アンドラー

シ (G. Andrassy) の会談では、アンドラーシが、二重帝国内のスラヴ民族に対してロシアが干渉しないように求め、汎スラヴ主義に否定的なゴルチャコフもこれを了承した。さらにゴルチャコフは、バルカンのキリスト教徒の状況改善についても協調の準備があることをほのめかしたのであった¹⁵⁾。こうして1873年4月のドイツ・ロシア間の軍事協約に続き、6月にはロシアとオーストリア・ハンガリー間で協約が結ばれ10月にはドイツがこれに署名をした。ここに三帝同盟が成立したが、どの国も自国の利益に都合良くこの同盟を利用したいと考えており、三国を一体化させる基本的なまとまりはなかった。希薄な同盟関係ではあったが、ロシアとオーストリア・ハンガリーの緊張関係を一時的には和らげることになった。

3. バルカンの危機の勃発

三帝同盟成立後、二年もしないうちに同盟システムの真価が問われることになった。バルカンの危機の勃発である。1875年7月、ヘルツェゴヴィナで始まった農民蜂起はまたたく間にボスニア全体にも広がった¹⁶⁾。ムスリムの地主対正教徒の農民という社会的にも宗教的にも錯綜した蜂起は、正教徒農民の自治要求へと発展していった。蜂起の勃発は、東方問題の新たな危機を高め、複雑な外交活動の始まりとなった。しかし危機の初期の段階では、以下に見るようにロシアとオーストリア・ハンガリーの関係はむしろ協調的であった。

ロシア国内では、バルカンにおける解放使命の即時実現を主張する汎スラヴ主義者の声が強くなりつつあった。しかし皇帝と外相ゴルチャコフは平和の維持を第一に考え、バルカンにおける勝手な行動に反対していた。三帝同盟の枠内でドイツ、オーストリア・ハンガリーと行動を共にし、ヨーロッパ協調の中で他の列強の意見を尊重し、戦争に訴えることなくバルカンのスラヴ人を助けることが可能、と考えていたのである。このためアクサーコフ (И.С. Аксаков) を中心とする汎スラヴ主義者たちは、イスタンブルのロシア大使イグナチエフ (Н.Г. Игнatieв) へ期待を強めていくことになった。ロシアの外交官の中でも最も汎スラヴ主義的な人物であったイグナチエフは、バルカン諸民族に自治を与えることを積極的に支持しており、ロシアの後ろ盾でスラヴ諸国をバルカンに生み出そうとしていた。彼は、バルカン諸民族の解放運動の指導者とも密接な関係を結んでいたのである。

オーストリア・ハンガリーでは1871年9月、外相がボイストからアンドラーシに交代していた。彼はハンガリー首相時代 (1867-1871) にロシアに対抗する同盟をビスマルクに提案し、拒否されたことから明らかなように、反ロシア的傾向の強い人物であった。1872年2月の御前会議においても、オーストリア・ハンガリーとロシア間の軍事対立が二年以内に起こりうること、ロシアがオスマン帝国に軍事行動を開始した後にロシアとの対立に入るべきなどと述べている。しかし軍部では、ドイツの支援がなければロシアとの戦争は無理であると考えられていたために、アンドラーシの意見は歓迎されることはなかった¹⁷⁾。

三帝同盟が成立した後も、アンドラーシは基本的には反ロシアの方針から外れることはなかった。ボスニア・ヘルツェゴヴィナでの蜂起勃発後、両地方への侵入を主張する皇帝や軍部の好戦的な雰囲気鎮める努力をしつつ、一方で帝国の野望の実現の道を探った。危機を通してのアンドラーシの主たる関心は、反ロシア、反スラヴの目的の達成であった。具体的には、バルカンにおけるロシアの保護を受けた一国、あるいは複数のスラヴ国家の建設を妨害することであった。さらに状況が許せばボスニア・ヘルツェゴヴィナの占領、戦略的に重要なノヴィ・パザールへの進撃も目標であった。

危機の初期から両地方に隣接するセルビア、モンテネグロが蜂起に強い関心を示していたことから、オーストリア・ハンガリーとロシアは、蜂起を平和的に解決できない場合は大きな困難に直面すると認識していた。両国は、蜂起した農民を満足させるような改革を導入させるために、オスマン政府に圧力をかけることで合意。8月にゴルチャコフは、両地方の自治という提案をウィーンに申し出た。オスマン支配下のルーマニアが享受しているのと同様な自治という案は、ロシアの目的を追求するものであり、アンドラーシには受け入れられぬ内容であった。彼は、自治はキリスト教徒のみが住んでいる地域では実現可能であるが、ムスリム、正教徒、カトリックの住民が対立しているボスニアでは、秩序の維持が不可能と考えていた¹⁸⁾。

イギリスがいかなる介入にも反対していたこと、ロシアとオーストリア・ハンガリー間の意見の相違もあって、列強は待機主義をとっていたが、これに不満を強めたのがイグナチエフであった。20年来イスタンブールのロシア大使であったことから、大宰相マフムド・ネディム・パシャ(Mahmud Nedim Pasha)に個人的な影響力を持っていた彼は、蜂起した農民の要求に一部応えるような改革の必要性をオスマン政府に訴えた。その結果オスマン側は、9月には公正な裁判の勅令を発令し、10月には農民に対して減税と徴税請負の廃止、地方行政組織への参加の権利を約束。12月12日には法の前の宗教の自由、ムスリムとキリスト教徒の平等をうたった勅令を発令した。しかし農民たちはこれらを信用せず、オスマン軍の撤退と両地方の自治という目標を掲げ、蜂起を続行した。

ゴルチャコフは危機の平和的解決を主張し、農民たちの要求を受け入れることでのみそれが可能であると指摘し続けていた。12月30日、アンドラーシはゴルチャコフに対抗する提案を列強に示した。アンドラーシ通牒として知られるこの提案は、自治ではなく列強の監督下の状況改善を提案するものであり、列強諸国の承認を得たものの、両地方の農民からは受け入れられず、失敗に終わった。

4. ライヒシュタット協定

1876年5月、ブルガリアでオスマン支配からの解放を求め、全土的な蜂起が始まった¹⁹⁾。5月12日、アンドラーシ、ゴルチャコフ、ビスマルクはベルリンで会談し、バルカンの危機に対する対応策を検討した。この機に及んでゴルチャコフは、ボスニア・ヘルツェゴヴィナに対する軍事介入と、東方問題を解決するための列国会議を提案した。しかしアンドラーシは、以下の二点からこの提案に難色を示した。周到な準備なしに軍事介入することは不可能であり、またロシア単独の介入は避けねばならない。列強の会議も慎重な時間をかけた準備が必要である。彼は、列国会議がバルカン諸民族に好ましい結果をもたらす可能性はあるが、バルカンにおけるオーストリア・ハンガリーの影響力を弱めることにつながると危惧したのであった。

ベルリンでは最終的にロシアが譲歩し、アンドラーシの外交的勝利に終わった。作成されたベルリン覚書は、オスマン帝国へ圧力をかけるという従来からの政策が復活した形となった。蜂起を続行している両地方の農民に対し、2ヶ月間の休戦を求め、その間に改革と和平を模索するというものであった。アンドラーシは両海峡への軍艦派遣というゴルチャコフの要求を認め、それと引き換えに、ゴルチャコフは列国会議案を取り下げたのであった。

ベルリン覚書は列強に回覧され、フランスとイタリアの賛成を取り付けたものの、再びイギリスがスルタンの威信を傷つけるという理由で拒絶したため、失敗に終わった。

ブルガリアでの蜂起は、約一ヵ月でオスマン政府により鎮圧されたが、鎮圧に際してオスマン

軍や不正規兵によって引き起こされた虐殺は、ヨーロッパ各国の世論を沸騰させることになった。オスマン帝国を擁護し続けるイギリスにおいても、前首相グラッドストーン（W.E. Gladstone）が著した『ブルガリアの恐怖』は、デイズレーリ（B. Disraeli）政権の外交政策に打撃を与えた。

6月末から7月にかけて、セルビアとモンテネグロは、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ地方の正教徒同胞を助けるという名目で、ついにオスマン政府に宣戦布告した。ここにバルカンの危機は新たな緊迫した局面に入ることになった。

ロシアは、軍事力の弱体なバルカンの二自治公国が敗北した際の問題とブルガリア問題を解決するためにも、積極的な介入がもはや避けられないと判断した。しかしより決定的な行動をとるためには、オーストリア・ハンガリーとの協調が必要であった。7月6日、ボヘミアのライヒシュタットでアレクサンドル2世とフランツ・ヨーゼフ及び両帝国の政策決定者たちが会談し、セルビア、モンテネグロとオスマン帝国の戦いで、不都合な結果が生じた場合には両国は一致した行動をとることで合意した。

ライヒシュタット協定と呼ばれるこの秘密協定によると、オスマン側の勝利の際は、セルビアとモンテネグロは現在の国境を維持するが、モンテネグロには完全な独立を与える。ボスニア・ヘルツェゴヴィナには、農民の要求している改革の導入をオスマン政府に求めるとした。この内容は、二国が軍事介入せずに戦争前の状態を復活させるというものであった。

これに対し、オスマン帝国の敗北時に関する合意は困難であり、基本路線は作られたものの、いっそうの協議が必要とされた。合意事項としては、勝者であるセルビア、モンテネグロは独立し、前者にはボスニア及びノヴィ・パザールの一部を、後者にはヘルツェゴヴィナの一部を与える。残るボスニア・ヘルツェゴヴィナ地方はオーストリア・ハンガリーによって併合されるとされたが、その境界は明確にはされなかった。一方ロシアは1856年に失ったベッサラヴィアを回復するほか、アジアでも領土を獲得することになっていた。すなわち、両国は等しく領土を拡大するはずであった。このほか、ギリシアはテッサリアとクレタを獲得し、アルバニア、ブルガリア、ルメリアには自治を与えることが決められた。さらにオスマン帝国が完全に崩壊した後は、イスタンブール（コンスタンチノーブル）とその周辺を自由都市とすることが合意された。しかしこの協定内容は、ビスマルクにさえ一部しか報告されず、第一次世界大戦後まで秘密にされていた²⁰⁾。

内容から明らかなように、この協定は、本来的には利害が対立していたロシアとオーストリア・ハンガリーが、同盟関係の中で勢力均衡論に立って、バルカンにおけるその勢力範囲を確定したものであった。ロシアの主張していたバルカン諸民族の自治は約束され、アンドラーシが懸念していたようなスラヴの大国家も生み出されることはなかった。妥協により両国は共に長年の野望を実現するはずであった。

しかし、この後のバルカンにおける新たな展開は、この協定を実現する方向へと向かうことはなかった。1876年12月の列国会議を経て、翌1877年4月、ロシアはついに単独でオスマン帝国に宣戦することになるのであった。

（以下次号）

注

- 1) 拙稿「ブルガリア民族解放運動と1876年四月蜂起」『東欧史研究』4号, 1981, 5号, 1982。拙稿「1878年ブルガリア公国成立に関する一考察」津田塾大学国際関係学研究No. 11, 1985。拙稿「地域の内外ネットワーク—19世紀バルカンにおける民族運動の展開—」浜下武志・辛島昇編『地域史とは何か』（地域の世界史第1巻）山川出版社, 1997年。

- 2) Marriott, J.A.R., *The Eastern Question*, Oxford, 1918, p. 1.
- 3) Anderson, M.S. *The Eastern Question*, New York, 1966.
- 4) 第二次世界大戦後になると、外交史の範疇とは異なってバルカンに密着した歴史研究も始まった。その代表的な著作として以下の3冊が挙げられる。Stavrianos, L.S, *The Balkans since 1453*, New York, 1958. Jelavichi, C. & B., *The Establishment of the Balkan National States*, Seattle, 1977. Fischer-Galati, S. & Dordjevich, D., *Balkan Revolutionary Tradition*, New York, 1981.
- 5) Българската Академия на Науките *Априлското въстание и източната криза 1875-1878*, София, 1977. БАН *Освобождението на България*, София, 1982. Дамянов, С. *Франция и Българската национална революция*, София, 1968. Косев К. *Бисмарк, източния въпрос и Българското освобождение 1856-1878*, София, 1978. *Исторически преглед-100 години от освобождението*, 1977 5-6, София. Христов, Хр. *Освобождението на България и политиката на западните държави 1876-1878*, София, 1968.
- 6) Киняпина Н. С. «Русско-турецкая война 1877-1878гг. и освобождение Болгарии.» *Россия и освобождение Болгарии*. Москва, 1982. Козьменко И.В. «Россия и освобождение Болгарии», *Балканские исследования* Вып. 4, Москва, 1978. Козьменко И.В. «Болгарский вопрос накануне и во время русско-турецкой войны 1877-1878гг.», *Формирование национальных независимых государств на балканах*, Москва, 1986. Конобеев В.Д., Мазаев, В.И. «Россия и национально-освободительное движение болгарского народа.» *100-летие освобождения болгарии от османского ига*. Москва, 1978. Никитин, С.А. *Очерки по истории южных славян и русско-балканских связей в 50-70 годы XIX в.* Москва, 1970. Улунян А.А. *Болгарский народ и русско турецкая война 1877-1878гг.* Москва, 1971. Чернов С.Л. *Россия на завершающем этапе восточного криза 1875-1878гг.*
- 7) Kiraly, B.K & Stokes, G.ed., *Insurrections, Wars, and the Eastern Crisis in the 1870's*, New York. 1985.
- 8) セルビア蜂起は1804年、イエニチェリ（オスマン政府の正規軍）の圧制に対して始まり、急速に拡大した。当時のナポレオン戦争の中で、ロシアの支援を受け、独立を求める闘争へと発展した。1813年にいったん鎮圧されるが、1815年に第2次蜂起が起こり、同年には一部自治を獲得した。ギリシア独立戦争は1821年のフィリケ・エテリアの蜂起に始まった。ギリシアは、ナヴァリノの海戦、露土戦争を経て、1829年に自治を承認された。
- 9) Seaton-Watson, R.W., *The Rise of Nationalities in the Balkans*, London, 1917.
- 10) Stojanovic, M.D., *The Great Powers and the Balkans 1875-1878*, Cambridge.1939.
- 11) Sumner, B.H., *Russia and the Balkans 1870-1880*, Oxford,1937.
- 12) Damianov, S., "European Diplomacy and the Eastern Crisis up to the Beginning of the Russo- Turkish War", Kiraly & Stokes ed. *op.cit.*, p. 47.
- 13) Islamov, T., "The Balkan Policy of the Habsburg Monarchy and the Austro-Russian Relations", Kiraly & Stokes ed. *op.cit.*, p. 37.
- 14) *Ibid*, p.35.
- 15) ルネ・ジロー著、渡辺・柳田・浜口・篠永訳『国際関係史1871-1914年』未来社、1998年、127-130ページ。
- 16) 1874年の不作が引き金となり、翌75年春から始まっていた農民の十分の一税の減税要求が発端となった。政府役人との交渉決裂後、農民が武装し反オスマン闘争に発展した。
- 17) Islamov, *op.cit.*, p. 38.
- 18) Suger, P. F. "Austria-Hungary and the Balkan Crisis", Kiraly & Stoeks ed. *op.cit.*, p.71.
- 19) 1870年代初頭、ロシア留学帰りの青年が中心となり、ルーマニア内に革命組織を結成し、ブルガリアでの革命宣伝と組織化を開始していた。ボスニア・ヘルツェゴヴィナでの蜂起勃発に呼応し、1875年8月にオスマン支配からの独立を求める蜂起を起こすが失敗。体制を立てなおし、準備を整えて翌76年5月に再度蜂起した。
- 20) Seaton-Watson, *op.cit.*, p.47.